［京大広報 No.632　2008.3］

随想　　教養課程の思い出

荒木　徹

１９５７（昭和３２）年京都大学入学の私達は，教養課程の１年目を宇治分校で，２年目を吉田分校で過ごした。陸軍火薬庫跡地の宇治分校には，暴発の際に上へ抜けるように作られた薄いトタン屋根・厚い壁の弾薬庫と高い土手が残り，蛙の鳴く池と小川と野草の間に，今思えば粗末な木造校舎が建っていた。敷地の奥，西の端にバラック的学生食堂があり，きつねうどんが１０円位であった。

英語の増野先生のテキストは，「チップス先生さようなら」でお馴染みのヒルトンの’Lost horizon’であり，有名なシャングリラが登場する事もあって，興味深かく読めた。先生は，いかにも楽しそうに解説され，「・・月の狂気か，狂気の月か・・」と節をつけて言われたのを思い出す。「訳本があれば教えてほしい」と言われたが，誰も知らなかった。数年後に先生ご自身の訳本が出たので，早速，買って読んだ。

ドイツ語の高安先生の教科書は，ケストナーの’Der Kleine Grenzverkehr’（小さな国境往来者）で，一夏を南ドイツのライヘンハルに滞在して隣接するザルツブルグ（オーストリア）に通うゲオルグが，喫茶店でコンスタンツエとの恋に落ちる物語であった。アララギの歌人でもあられた先生は，これに出てくるザルツブルグの街頭劇’Jeder Mann’の様子を，これまた実に楽しそうに話された。３０年後，ドイツの研究所に滞在した際に，この教科書を思い出し，近くのゲッチンゲンの書店で購入した。枕元に置いて，ドイツ語を思い出すのに眺めていたが，最近，「一杯の珈琲から」という題で，この物語の訳が出ていることを知り，通して読むことができた。

吉田分校の三高時代の古い木造校舎で，ル・フォールの’Die Frau des Pilatus’（ピラトの妻）を講じられたのは，平井先生だったと思う。エルサレムでキリストを処刑したローマの執政官ピラトの妻の苦悩の物語だったが，初学者には難しく，試験直前に知った訳本を参考にして勉強した。後日，同じ著者の他の作品も収めたこの訳本全編を読み，ル・フォールが，５０歳近くになってから作品を書き始めて高い評価を得るようになったドイツカソリックの女流作家であることを知った。ガリレオの異端審判を書いた「天国の門」は，特に興味深かった。

西洋社会思想史や文化人類学も新鮮で面白く，この分野の書物に目を向けるきっかけになった。これらの講義は専門課程の勉強に直接役立つものではなく，原語の小説も授業では部分的にしか読めなかったのだが，文系学問から離れて理系に進む私には入門として貴重で，心の世界を豊かにしてくれた。自ら楽しむような先生方の授業は，学問の世界に憧憬を抱かせ，大学に残ることになった私の生き方にも影響を与えたと思っている。

大学前期２年間の在り様には色々な考え方があるが，受験勉強から解放されて専門課程に進む迄のこの期間は，人生で最も自由に勉学できる時であり，教養教育として充実させることを願う。専門知識の背後にある教養は，個人の知的世界を広げるだけでなく，この社会が抱えている困難の打開にも必須だと思うからである。複雑な事象を単純に割り切って結論を出す粗雑な議論が多くなっている今こそ，多面的に深く考察できる力が必要なのであり，その基礎となる文理両系のバランスの取れた教養が重要になる。その意味で，教養課程の外国語教育も，会話とディベイトの訓練は別にするとして，教養教育の一つであって欲しい。

当時の京大入試では，理系志願者にも社会２科目が課されたが，今の２次試験はそうでない。そのせいか，理系の優秀な学生が，「歴史はよく知りません」と悪びれずに言ったりして，これで良いのかと危惧を抱かせる。このような知識の偏りの是正にも教養課程は役立つであろう。先ず自国の，それから世界の歴史や文化について良く考えている人間が尊敬される国際人になれるのだと思う。

（あらき　とおる　平成１４年退官，元理学研究科教授，専門は地球電磁気学・太陽地球系物理学）